

聖書の植物の姿と効用 8 *

—旧約聖書の植物 4 (士師記, ルツ記, サムエル記上下, 列王記上下,
歴代誌上下, エズラ記, ネヘミヤ記, エステル記,
ヨブ記, 詩編の植物) —

広 部 千恵子

Abstract

Plants of the Bible described in Judges, 1 Samuel, 2 Samuel, 1 Kings, 2 Kings, 1 Chronicles, 2 Chronicles, Ezra, Nehemiah, Esther, Job and Psalm are described in this paper. I have already published 7 times in this Annuals. Therefore, those already explained before are not included in this paper.

新約聖書の植物および旧約聖書の中の創世記, 出エジプト記, レビ記, 民数記, 申命記, ヨシュア記については前回までに述べてきた。今回は以前に述べられていない植物に限定して士師記, ルツ記, サムエル記上下, 列王記上下, 歴代誌上下, エズラ記, ネヘミヤ記, エステル記, ヨブ記, 詩編の植物について検討してみる。なお引用した図面は特に引用文献を記載していないものは M. Zohary の Flora Palaestina からのものである。

あざみ

バルカン (בַּרְקָן) 複数形としてバルカニム (בַּרְקָנִים)

ギデオンは、「そうか。それなら主がゼバとツォルムナをわたしの手にお渡しになるとき、わたしは、お前たちのその身を荒れ野の茨ととげで打ちのめす」と言った。(士師記 8 : 7)

ギデオンは町の長老たちを捕らえ、荒れ野の茨ととげをもってスコトの人々に思い知らせた。(士師記 8 : 16)

* Plants Described in the Bible : Their Anatomy and Everyday Use 8

—Plants Described in the Old Testament, Part 4—



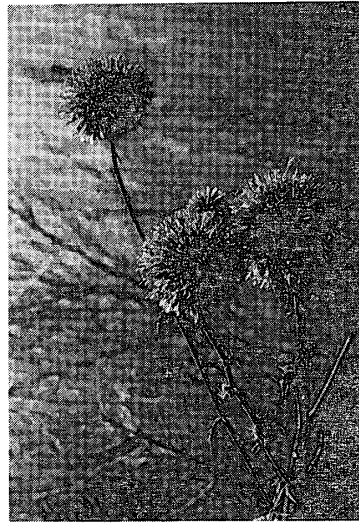
Notobasis syriaca



Silybum marianum

イスラエルに日本のあざみに似ているキク科の植物は 50 種類以上におよび、荒れ地を覆いつくしている。この士師記の 2 ヶ所に出てくるとげとはヘブライ語でバルカニム (בַּרְקָנִים) となっている。具体的に何がこれに当たるかの確証は何もない。ただ文体から理解するにあざみの仲間のうちでも比較的大きなものであることが理解できる。

M. Zohary はこれに対してキク科の *Notobasis syriaca*, *Silybum marianum*, *Echinops viscosus* を当てている。これらが特にバルカム (上の文ではとげ) であるとい



Echinops gaillardotii

う保証はないが、ギデオンが鞭のようにして用いたとすると大きなあざみ類に違いはないと言っている。

Notobasis syriaca (בִּרְקָן סִירִי) はシリアのバルカンとヘブライ語でなっている。一年草で、冬に葉を地面近くに出し、春になると茎が出てその先端にあざみのような花を咲かせる。

Silybum marianum はオオアザミ、マリアアザミ、Milk thistle などの名があり、同様に冬の間は葉を地面近くに出すが、春になると大きくなり、人の背丈よりも高くなる。春先にピンクか白の花をつける。葉には白い島模様のようなものがあり、ミルクがたれたような状態になっている。両方とも下から切り取れば鞭に使えるであろう。マリアアザミは食欲増進剤、強壯剤、解熱剤として使用し、種のチンキは肝臓に、黄疸に、胆石、腹膜炎、咳、気管支炎、子宮の鬱血、静脈瘤などに使用する。

Echinops viscosus は日本の九州などに自生しているヒゴタイと類似し、多年草で、初夏に球状に集花した花を咲かせる。ガリラヤ地方などにあるのは紫色のヒゴタイの仲間がある。写真はこのヒゴタイの一種 *Echinops gaillardotii* である。

しかしこの三種以外にも何種類かの背の高いあざみはあるし、その他のとげのある植物であっても構わないような気がする。

その他のあざみ

Centaurea iberica

キク科

ダルダル (דלדל)

Spanish thistle, Star thistle

神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる野の草を食べようとするお前に。(創世記 3：17～18)

アベンの聖なる高台このイスラエルの罪は破壊され茨とあざみはその祭壇の周りに生い茂る。そのとき、彼らは山に向かい「我々を覆い隠せ」丘に向かっては「我々の上に崩れ落ちよ」と叫ぶ。(ホセア 10：8)

の2箇所にはダルダルというヘブライ語がでてくる。これに対して Zohary は *Centaurea* spp.をあてている。ポピュラーな *Centaurea iberica* はイスラエルの荒れ地に自生し、冬は地面にへばりついて平らになっている。この時期には野菜として食することができる。乾季になると丈を 50 cm 位に伸ばし、花を咲かせる。花にはシャープな刺の冠があり、



Centaurea iberica
写真：オーリー・フラグマン

この頃になると触ることもできない。

Scolymus maculatus

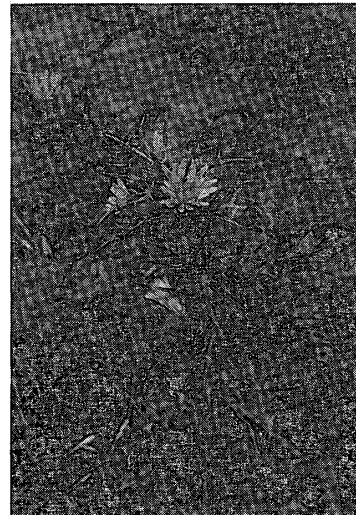
Scolymus hispanicus

ホアハ ()

Golden thistle

わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ持ち主を死に至らしめたことは、決してない。もしあるというなら小麦の代わりに茨が生え、大麦の代わりに雑草が生えてもよい。ヨブは語り尽くした。(ヨブ 31：39～40)


その他の箇所としては 1 Sa 13：6，2 Ki 14：9，2 Ki 14：9，2 Ch 25：18，2 Ch 25：18，2 Ch 33：11，Job 40：26，Sol 2：2，Isa 34：13，Hos 9：6 にある。*Scolymus maculatus* は畑などに生え、上の方で枝わかれしている一年生の背の高い黄色の花を咲かせる植物で、*Scolymus hispanicus* は荒れた見捨てられた土地に咲くもっと根元の方から枝わかれしたやはり黄色の花を咲かせるあざみで、これが前述のバルカニームの一つと考えられないこともない。



Scolymus hispanicus

そらまめ *Vicia faba*

マメ科 Leguminosae

ポール ()

Broad bean, Horse bean, Pigeon bean

ダビデがマハナジムに着くと、ラバ出身のアンモン人ナハシュの子ショビ、ロ・デバル出身のアミエルの子マキル、ロゲリム出身のギレアド人バジライとが、寝具、たらい、陶器、小麦、大麦、麦粉、炒り麦、豆、レンズ豆、炒り麦、蜂蜜、凝乳、羊、チーズを食糧としてダビデと彼の率いる兵に差し出した。兵士が荒れ野で飢え、疲れ、渴いてい

るにちがいないと思ったからである。(サムエル下 17:27~29)

あなたは小麦，大麦，そら豆，ひら豆，きび，裸麦を取って，一つの器に入れ，パンを作りなさい。あなたが脇を下にして横たわっている日数，つまり三百九十日間，それを食べなさい。(エゼキエル 4:9)

サムエルの豆と訳されているものとエゼキエルのそら豆が聖書時代から聖地で栽培されていたソラマメで，ともにヘブライ語聖書にはポール (פול) となっている。そしてエジプトでも聖書時代以前から既に栽培されていた。聖地では1m近くにもなり，さやには3~6個の種が出来る。これが食用になる。そのまま茹でても，ピューレー状にしても，乾燥させても食べるが，中東では他の豆類に変わってきている。

そら豆は暖かく，夏は乾燥した地中海の地域でも，もっと北のヨーロッパやアジアの地域でも栽培でき，今は中国が一番の産地となっている。種子は蛋白質の含量が多く，20~25%にのぼる。そこで，エジプトなどでは貧しい人々の蛋白補給源になっていた。そら豆は家畜の餌としても使用された。Horse bean という名はここからきている。そら豆は染色体が $2n=12$ である。そら豆

は自家受粉ではないので，次第にいろいろのものが出来てくる。大きさ，形にもいろいろの変化が見られる。V. faba var. major, V. faba var. equina, V. faba var. minuta などである。

そら豆の野生の先祖はまだ見つかっていない。イスラエルに自生する Vicia narbonensis や Vicia galilaea および類似の地中海沿岸および近東の植物は非常に形態学的にはそら豆と似ている。カルメル山で観察したが，そっくりである。しかし染色体は $2n=14$ で，



Vicia faba



Vicia narbonensis



Vicia galilaea

12 ではない。今後の発見に期待する。

考古学的発掘によって、そら豆の栽培は BC 3000 年以前のもものが、地中海沿岸や中央ヨーロッパ等で見ついている。しかし、ナザレの近辺で BC 6000 年代のもものが、エリコでも非常に古いものが見つかり、多分そら豆ではないかと思われている。今後の調査に期待できる。

白檀 → コウキシタン

Pterocarpus santolinus (コウキシタン) (サンダルシタン)

マメ科 Leguminosae

アルムグ (אַלְמוּג), 複数形として使用アルムギム (אַלְמוּגִים)

また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や詠唱者のための豎琴や琴を作った。このような白檀がもたらされたことはなく、今日までたれもそのようなことを見た者はなかった。(列王記上 10:11~12)

またレバノンからレバノン杉、糸杉、白檀の木材を送ってください。わたしは、あなたの家臣たちがレバノンの山林の伐採のことをよくわきまえていることを知っています。(歴代誌下 2:7)

ヘブライ語で列王記の白檀はアルムグの複数形アルムギウム (אַלְמוּגִים) になっている。この他列王記上 10:12 にも 2ヶ所で使用され、計 3 回アルムグが登場してくる。一方歴代誌のはアルグムの複数形アルグミム (אַלְגוּמִים) になっている。歴代誌にはこの他歴代誌下 9:10 と 9:11 にアルグミムが登場し、計 3 回使用されている。両者とも複数形で使われているが、同一か否かは不明である。ただ両者は対応箇所であるので M. Zohary は一語入れ替わってしまった可能性も指摘している。そこでアルムグもアルグムもともに白檀としている。白檀はインド産でコウキシタン、サンダルシタンなどと呼ばれ、落葉の小高木である。三味線などの楽器に使用するし、材からは紅色の染料が取れ、

ヒンズー教徒などが額を染めるために使用している。一般に白檀という時にはビャクダン科に属する *Santalum alubum* (White sandal wood) で、ジャワからチモールにかけてが原産地で、常緑の小高木で半寄生植物である。インドなどで栽培している独特の香りのある木材であるので、この訳は白檀としない方がよい。

えにしだ → シロレダマ

シロレダマ *Retama raetam*

マメ科 Leguminosae

ローテム (𐤇𐤍𐤅)

white bloom

彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。(列王記 19:45)

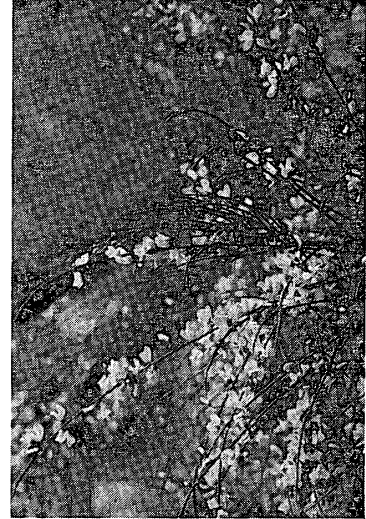
この聖書の箇所はエリヤがイザベルの魔の手を逃れてベエル・シェバから更に砂漠に入り込んだ時の記載である。この辺りはシロレダマが沢山生えている。対応箇所は新改訳でもえにしだで、口語訳だけれだまになっている。れだまはシロレダマと異なり、やはり黄色の花の咲くマメ科エニシダ属の *Spartium junceum* (Spanish broom, Rush broom) である。この植物もイスラエルに自生している有毒植物である。花は極少量で利尿や下剤の目的で、種は下剤として使用している所もある。シロレダマは砂漠で深く根を張り、水脈にまでその根を伸ばすので、乾燥した砂漠の乾季でも枯れないでいる。冬に毛様の葉が生えるが、2～3週間で落ちてしまう。春、ネゲブや海岸地帯、サマリアで白っぽい花が咲き、一面に白くなり美しい。えにしだ *Cytisus scoparius* は同じマメ科に属するが、ヨーロッパ中・南部に原産し黄色の花の咲く植物で、有毒植物で葉には sparteine があり、解熱に使用している。イス

ラエルに咲いている縁が紫がかった白の花のシロレダマとは異なる。ヨブ 30：4 にも同じ植物が出てくる。

あかざの葉を摘み れだまの根を食糧としていた。(新共同訳)

彼らはやぶの中のおかひじきを摘み、えにしだの根を彼らの食物とする。(新改訳)

彼らは、ぜにあおいおよび灌木の葉を摘み、れだまの根をもって身を暖める。(口語訳)



Retama raetam

新改訳はえにしだとなっているが、新共同訳は今度は何だまになり、口語訳ではれだまとなっている。これも前に述べたような理由で両方とも違う植物である。同じローテム (רֹתֵם) というヘブライ語に対して、同じ聖書でも異なる訳を使用している。

シロレダマは根や幹を炭にする。シロレダマの炭は硬く、上質で、火持ちがよい。そこでつい最近まで、ベドゥインたちはこの炭を作って売っていた。しかしローテム保護の為に今はやたらに伐採することは禁止されている。このローテムの炭は火持ちが良いので、安息日の料理を温めて置くのに使用した。ユダヤ人は安息日に仕事をすることを禁じられているので、ローテムの炭火に灰をかけてその上に鍋を置いておいたのである。このことを考えに入れると植物の名を直せば、口語訳のようにローテムの根で身を暖めるのがよい訳であろう。ローテムの根は硬くて食べられない。

詩編 120：4 では

勇士の放つ鋭い矢よ えにしだの炭火を付けた矢よ。(新共同訳)

勇士の鋭い矢、それに、えにしだの熱い炭火だ。(新改訳)

ますらおの鋭い矢と、えにしだの熱い炭とである。(口語訳)

とすべてえにしだになっている。これはローテムの炭のことを言っているのである。

ローテムの根は下剤、枝は解熱剤、傷の手当て、枝を粉にしたものを蜂蜜と混ぜて催吐剤、下剤や駆虫剤にしているが、果実は有毒である。

その他 2 Ki 18：27 と Isa 36：12 にローテムの記載がある。

鳩の糞 *Ornithogalum* spp.

ユリ科オーニソガラム属

その後、アラムの王ベン・ハダトは全軍を召集し、攻め上がって来て、サマリアを包囲した。サマリアは大飢饉に見舞われていたが、それに包囲が加わって、ろばの頭一つが銀八十シエケル、鳩の糞四分の一カブが五シエケルで売られるようになった。(列王記 6：24～25)

ここに鳩の糞と書かれているのはオーニソガラム属の植物で、イスラエルには *Ornithogalum narbonense* など数種類のオーニソガラム属の植物が自生している。この根は小さいが、食用にしたことがあるようである。*O. umbellatum* はオオアマナと呼ばれ、その他 *star of Bethlehem* の名がある。



Ornithogallm narbonense

イタリアイトスギ

Cupressus sempervirens

ヒノキ科イトスギ属

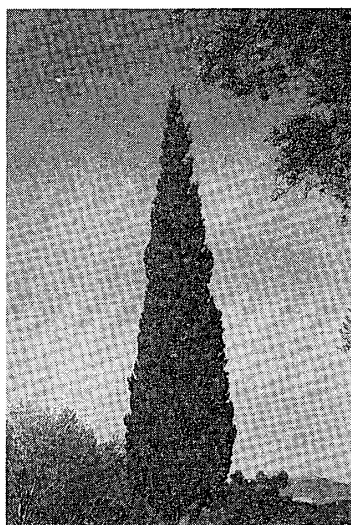
ベローシュ (שִׁרְיָה)

Evergreen cypress, Italian cypress

ティルス王ヒラムがソロモンの望みどおりにレバノン杉と糸杉の材木や金を提供してくれたので、ソロモンはヒラムにガリラヤ地方の二十の町を贈った。(列王記上 9：11)

そこに鳥は巣をかける。こうのとりの住みかは糸杉の梢 (詩編 104：17)

ヒノキ科イトスギ属の針葉樹でヨーロッパ南部原産である。暖地でよく生育し、枝からイトスギ油が採取され、香料や咳どめになる。このベローシュ (שִׁרְיָה) については 2 Sa



Cupressus sempervirens

6 : 5, 1 Ki 5 : 22, 1 Ki 5 : 24, 1 Ki 6 : 34, 1 Ki 9 : 11, 2 Ki 19 : 23, 2 Ch 2 : 7, 2 Ch 3 : 5, Psa 104 : 17, Isa 14 : 8, Isa 37 : 24, Isa 41 : 19, Isa 55 : 13, Isa 60 : 13, Eze 27 : 5, Eze 31 : 8, Hos 14 : 9, Nah 2 : 4, Zec 11 : 2 に記載されている。

聖書のペローシュをイタリアイトスギに限定する説もあるが、M. Zohary はイタリアイトスギ、マツ科モミ属のキリキアモミ *Abies cilicica* (Cilician fie) およびヒノキ科ネズミサシ属の *Juniperus excelsa* (Eastern Savin) の3つの植物の総称であると言っている。彼はペローシュがことにレバノン杉と一緒に出てくる時にはキリキアモミであろうとしている。このモミはレバノンでレバノン杉とともに生育している。しかしレバノン

のその辺りにはイタリアイトスギは生育していない。このイタリアイトスギはガリラヤには希で、ヨルダンのエドムにある。かつてはユダ山地にもあったことが、花粉や家具や建物の発掘によって証明されている。またヒノキ科ネズミサシ属の *Juniperus excelsa* もレバノンに現在生育している。そこで、エゼキエル 27：5 の「彼らはセニルの檜でお前の外板を造り レバノンの杉で、帆柱を立てた。」はこの植物であろうし、そこで逆にレバノン杉といっしょに出て来ないペローシュはこのイタリアイトスギと考えるとよいかもかもしれない。

ハマアカザの仲間

Atriplex halimus

アカザ科ハマアカザ属

マルアハ (מִלְחָה)

orache, Tree purslane

あかざの葉を摘み れだまの根を食糧としていた (ヨブ 30：4)

この箇所はオカヒジキ、ゼニアオイなどの訳が当てられている。ヨブ記のこの箇所にだけ出てくるマルアハ (מִלְחָה) に対して M. Zohary はヨブは砂漠の植物について言及しているので、ゼニアオイのようなものでなく砂漠にもっとも普通に自生するハマアカザの仲間、*Atriplex halimus* の可能性が大きいと言っている。そしてある *Atriplex* の仲間がアラブ人の間でムラハと呼ばれていることにも、飢饉の時にはその葉を羊飼いたちや羊たちも食べることを根拠にしている。

Atriplex halimus は砂漠でもっとも普通に生えている植物で、1~2 m の高さの元から枝分かれしれ、卵形の銀灰色の葉で毛があ



Atriplex halimus



Malva sylvestris



Salsola fusca

る。

ヨブ記のこの箇所が新改訳ではおかひじき，口語訳ではぜにあおいになっている。ゼニアオイ属のうちには砂漠にも自生しているものもあるし，殆どが食用にもなる。またおかひじきと訳したのはおそらく Salsola (オカヒジキ) 属の植物を意味するのであろう。これも 10 種類以上もイスラエルにあり，砂漠に自生しているものもある。はっきりとした同定の困難な植物の一つである。

綿 *Gossypium herbaceum*

アオイ科ワタ属

カルパス (קָרְפָּס)

cotton, short staple cotton, Levant cotton

大理石の柱から柱へと紅白の組みひもが張り渡され，そこに純白の亜麻布，みごとな綿織物，紫の幔幕が一連の銀の輪によって掛けられていた。また，緑や白の大理石，真珠貝や黒躍石を使ったモザイクの床には，金や銀の長いすが並べられていた。(エステル 1：6)

綿については綿布の形で一回出てくるだけである。アハシュエロス王の宴会である。他のアオイ科の植物と同様な花が黄色に咲く。背丈は 1 m 位で，葉な 3～5 の裂片



Gossypium herbaceum

になっている。多年草であるが、栽培品は一年草として扱う。果実は沢山の種子のあるカプセルで開くと白～黄色味がかかった毛が種を覆っている。この綿はイスラエルでは聖書のあまり古い時代には栽培されていなく、アメリカやパキスタンなどの方が遙かに古い。また聖書時代には亜麻が植物繊維の主役であった。機械化とともに亜麻はあまり使用されなくなり、綿が現在は取って変わっている。

Eruca sativa

アブラナ科キバナスズシロ属

オロット (ארות)

Rocket

彼らの一人が野に草を摘みに出て行き、野生のつる草を見つけ、そこから野生のうりを上着いっぱい集めて帰って来た。彼らはそれが何であるかを知らなかったので、刻んで煮物の鍋に入れ、(列王記下 4 : 39)

この草がヘブライ語ではオロット (ארות) となっている。これははっきりとはしないが、ギルガルで集められ、ここには今でもこの植物があること、アラビア語で jarjir と呼ばれる *Eruca sativa* がここにあること、ベドゥインがサラダや煮物に集めることなどから、*Eruca sativa* の可能性を Zohary は説いている。しかし、すべての食べられる草の総称であることも十分考えられる。

Eruca sativa は抗壊血病薬、興奮剤、発赤剤などに使用し、サラダとしても用いるが、媚薬の効があるともいう。



Eruca sativa

Suaeda spp. マツナ属

アカザ科

テコアの父アシュフルには、ヘルアとナアラという二人の妻がいた(歴代誌上 4：5)

シャムシェライ、シェハルヤ、アタルヤ、(歴代誌上 8：26)

Zohary はこのアシュフルとシェハルヤが shahor (ヘブライ語の黒) から導き出されたものではないかと言っている。Suaeda のアラビア語が Suweda や Suaid (黒) であることからである。

Suaeda 属の植物はイスラエルの死海沿岸、アラバの谷、などの砂漠地帯のしかも塩分のある土地に自生している。小低木で、肉厚のシリンダー状の葉をしている。図は Suaeda vermiculata で、写真は Suaeda monica である。



Suaeda monica

グンデリアアザミ Gundelia tournefortii

ガルガル (גַּלְגַּל)

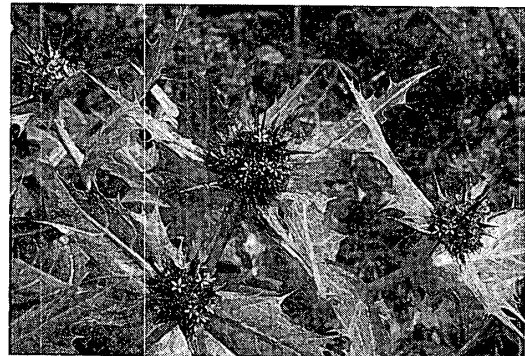
わたしの神よ、彼らを車の輪のように 風に卷かれる藁のようにしてください。(詩編 83：14)

国々は、多くの水が騒ぐように騒ぎ立つ。
だが、主が叱咤されると彼らは遠くへ逃げ
る 山の上で、もみ殻が大風に 枯れ葉が
つむじ風に追われるように。(イザヤ 17：
13)

ガルガル (גַּלְגַּל) は草の名ではないが、転が
る草を表す。

Psa 77 : 19, Ecc 12 : 6 , Isa 5 : 28, Isa
28 : 28, Jer 47 : 3, Eze 10 : 2, Eze 10 :
6, Eze 10 : 13, Eze 23 : 24, Eze 26 : 10,
Dan 7 : 9

にもヘブライ語のガルガルという言葉は出
てくるが、すべて車輪、まわるなどの意味
に使用されている。詩編 83 : 14 およびイザ
ヤ 17 : 13 のガルガルがグンデリアアザミ
を意味しているという根拠はどこにもな
い。イスラエルのような砂漠では花が咲い
た後に種子が出来、其の種子を植物全体が
丸く囲んで包み、転がって行って雨季の到
来とともに開き、そこで発芽するような植
物がかなりある。



Gundelia tournefortii

グンデリアアザミはそのうちの一つにしか
すぎないが、詩編の引用では車の車輪を連想させるような記載なので、大きな転がる草
ということで、この植物を引用しているひとが多いのであろう。この植物はキク科に属
するが、非常にガッシリとした大きな植物で草丈も 50 cm 位になる。大きくなるとあざ
みのように硬く、レザー様になるが、若い時には柔らかく、食用になる。枝分かれした
各茎は 5 ~ 8 個の集花がまとまって付き、その中央の花は 6 ~ 7 個で、其の中央だけが
受粉する。出来たナッツは脂肪分に富み食用になる。現代ヘブライ語でグンデリアアザ
ミをアクビットハガルガル עֲפֹבִיית הַגַּלְגַּל といひ、ガルガルが言葉の中に入っている。

アンザンジュ *Anastatica hierochuntica*

アブラナ科アンザンジュ属

俗にエリコノバラ Rose of Jericho と呼ばれているものであるが、実はバラではなく、アブラナ科の植物でイスラエルには死海周辺にも、ネゲブにも自生している。グンデリアアザミのように大きくはないが、転がる草の代表である。葉は砂漠の植物特有にやや厚く、ざらざらとしている。花は小さな5 mm 位のめだたないものであるが、結実すると植物全体は硬くなり、種子を中心に囲み転がって行く。雨季が来て雨に当たるとこの固くまるまった植物が開き、種子がこぼれて発芽するが、ネゲブやアラバの谷で雨が降らないと2～3年前の丸まった種子を見ることができる。

エリコノバラの乾燥植物の浸液は子供が生まれる時の痛みを和らげ、誕生を容易にするとされている。また通経薬、癲癇、風邪などにも使用している。



Anastatica hierochuntica (花)



Anastatica hierochuntica (果実)

Zilla spinosa

アブラナ科

ツィラ (צִלָּה)

Spiny zilla

きて、レメクは妻に言った。「アダとツィラよ、わが声を聞け。レメクの妻たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。わたしは傷の報いに男を殺し打ち傷の報いに若者を殺す。(創生記 4：23)

このツィラという言葉は創世記 4 : 19 および 4 : 22 にも名前が出てくる。エゼキエル 28 : 24 にもシロン (שִׁלֹן) として刺のある植物として出てくるが、同じものだからどうかは不明である。この植物は砂漠に自生するアブラナ科多年生の植物で 1 m 位になる。茎の下の方にある葉は大きいですが、上の方は小さな葉になっている。ピンクがかった紫の花をつけ、やがて実ができ、枯れると根から抜けて丸まって転がり出す。転がる草の可能性はある。

コロシントウリ

Citrullus colocynthis

ウリ科

ゲフェン・サデー (גֶּפֶן שָׂדֵי)

colocynth, bitter apple gourd

彼らの一人が野に草を摘みに出て行き、野生のつる草を見つけ、そこから野生のうりを上着いっぱい集めて帰って来た。彼らはそれが何であるかを知らなかったので、刻んで煮物の鍋に入れ、人々に食べさせよ

うとよそった。だが、その煮物を口にしたとき、人々は叫んで、「神の人よ、鍋には死の毒が入っています」と言った。彼らはそれを食べるができなかった。(列王記下 4 : 39~40)



Zilla spinosa

このコロシントウリはイスラエルの海岸南部、ヨルダン溪谷、シナイ半島、ネゲブなどに自生している。フルーツは猛毒である。このシナイやネゲブのベドゥインはコロシントウリの皮を剥いて薬用に使っている。種は食べることができる。

多年草で実はりんご位の大きさに熟すと黄色になる。中はスポンジ様になっている。これはスイカの原種となっている。コロシントウリ自身は毒であるが、少量を峻下剤に使用している。図はスイカのところで掲載した。

なお、最終号はキリスト教文研究所年報に掲載の予定

参考文献

- (1) The New International Version Interlinear Greek-English Testament (Marshall) Zondervan Publishing House
- (2) ヘブライ語聖書 Koren Publishers Jerusalem Ltd. 他2種
- (5) 聖書新共同訳 日本聖書協会
- (8) Plants of the Bible (Michael Zohary) Cambridge University Press
- (16) Medicinal Plants of the Bible (James A. Duke) Tradco Medic Books 1983
- (23) 聖書の植物 (大槻虎男) 教文館
- (27) 熱帯の有用作物 農林統計協会刊 1975
- (30) Herbs, Spice and Medicinal Plants: Recent Advances in Botany, Horticulture, and Pharmacology Volume 1 (Lylee, Craker, James E. Shimon 編) Medicinal Plants of Israel: An Ethnobotanical Survey (D. Palevitch, Z. Yaniv, A. Dafni, J. Friedman)
- (37) 世界有用植物事典, 平凡社 1989
- (40) Nature in Our Biblical Heritage (Nogah Hareuveni) Neot Kedumim, 1980
- (41) Tree and Shrub in Our Biblical Heritage (Nogah Hareuveni) Neot Kedumim Ltd.
- (42) Flora Palaestina 1-4 (Michael Zohary) The Israel Academy of Sciences and Humanities
- (43) Medicinal Plants of North Africa (Loutey Boulos) Reference Publications Inc. 1983
- (53) A New Concordance of the Bible (edited by Abraham Even-Shoshan) "Kiryat Sefer" Publishing House Ltd., Jerusalem (ヘブライ語)
- (56) Bible Works for Windows, Research Buddle, Hermeneutika
- (59) Illustrated encyclopedia of Bible plants (F. Nigel Hepper) Angus Hudson Ltd.
- (60) 植物療法 R. F. ヴァイス著 山岸訳 八坂書房 1994
- (64) Domestication of Plants in the Old World by Daniel Zohary and Maria Hoph, Oxford Science Publications, 1993
- (68) J-Bible 3rd いのちのことば社